

# 「古典」の和歌——『紫式部集』「わりなしや」詠歌から——

植田恭代

## 一、「古典」文学

人文学科に所属する日本古典文学の領域を専攻する教員として、稿者は授業でも「古典文学」に該当する分野を担当している。本学科は、広領域であるため、日本文学専門の学科を置く大学とは異なり、日本文学史における上代、中古、中世、近世、近代という通行の時代区分のなかに担当科目があるわけではない。古典か近代かで線引きがなされ、平安時代の文学を中心とした文学作品や作家を研究対象とする稿者は、おのずと早い時代の担当になる。したがって、扱うのは、文学のジャンルとしては古典、時代で分ければ古代、教職課程の国語対応ならば古文が対象となる。

稿者の担当する分野には、「古」の一文字が冠される。これがともすると学生たちの懸念を呼ぶ、らしい。「古」の一文字が、現代からかけ離れた遠い昔をイメージさせ、対象となる作品まで遠ざけ

てしまう。学期のはじめに、自己紹介がてら受講の動機や興味などを訊けば、必ずといっていいほど添えられるのは、「実は古典が苦手……」というひとことである。「苦」の類出には、こちらも苦笑させられる。高等学校の限られた時間内で習う古典文法に苦手意識を抱き払拭されぬまま、大学に進学して、後期課程にまで継続する場合とて珍しくはない。

さらに、苦手意識に拍車をかけているのは、「古典」あるいは「古代」という用語そのものである。高等学校の教科書でとりあげられにくい作品などは化石の如く、「古典」は古色蒼然とした分野、と受けとめられてしまいがちである。

しかし、「古」という漢字は、古くさいもの、ひからびたものを意味するわけではない。時間の流れからすれば早い時期にあたるが、「古」の訓みである「いにしへ」の「へ」は方向性を表すという語源的な説明もあり、過去からの継続を含むととらえることも可能である。現代と隔絶するのではなく、むしろ、現代にまで続く強靱な

生命力を持つもの、それこそ「古典」である。

平安時代の「古典」文学を顧みれば、歳月を経て現代にまで伝えられた稀少な作品が「古典」である。物語でいえば、平安時代の仏教説話である源為憲『三宝絵』の序文には、当時の物語事情について「又物ノ語と云テ女ノ御心ヲヤル物、オホアラキノモリノ草ヨリモシゲク、アリソミノハマノマサゴヨリモ多カレド」と記され、女性たちの心を慰める物語が、大荒木の森の下草や浜の真砂より多かつたことが知られる。数知れず存在した物語のうち、現代の古文の教科書にとりあげられる作品となれば、ほんのひとにぎりではない。それは、物語以外でも同様であろう。現在手にすることのできる「古典」とは、常に魅力の光輝を放ち、それぞれの時代にもとめられ読み継がれてきた作品なのである。

「古典」ということばは『春秋左氏伝』や『漢書』からあり、古代の制度を表し、また古代のすぐれた典籍という意味を持つ。「古典」文学も、遠い過去の作品ながら、後の世を照らす規範となる作品と解釈できよう。

そもそも、「古典」という用語じたいが、ゆるがぬ絶対的なものとしてあるわけではない。かつて、西郷信綱氏は『日本古代文学史改稿版』の「序」のなかで次のように述べていた。

では、古典と呼ばれるものはどこにあるかといえ、それは過去と現代のあいだ、つまり過去にぞくするとともに現代にもぞくするというほかない。日附がいかに古かろうと、文学として訴えてこなければそれは古記録で、現代人に対話をよびかけて

くる力をもったもののみが古典であり、そしてこの過去と現代に同時にぞくするものを、歴史的継起の秩序における一つの特殊な人間活動としてとらえようとするのが文学史の役目ということになるだろう。

これは、戦後から日の浅い時期の文学史執筆のための序の一部ではあるが、過去か現代かではなく、現代に訴えてくるものという観点は、いまなお斬新かつ有効であり得よう。現代にまで読み継がれる「古典」文学は、わたくしたちの心に、歳月をこえて働きかけてくる。だからこそ、「古典」文学が現代における研究対象となり、授業という場においては、それを若い受講者たちに伝えていく必要も生じる。それゆえ、大学の教室で、「古典」文学は古くない」と話し続けることになる。

清少納言は教室で品詞分解をしてもらうために『枕草子』を書いたのか。敬語を勉強してもらうために『源氏物語』が執筆されたのか。そう話せば、受講者たちは、はっとしたような表情を見せる。ひとたび冷静に考えれば一笑に付されるような、ごくあたりまえのことに気づく暇すら持ち得なかつたのである。それならば、広くゆるやかに考える時と場に恵まれた大学で、日本文学を専攻しない人であれ、「古典」に身をゆだねる機会を提供する意義も生じよう。「古典」文学にはそれぞれの時代の社会背景や文化があり、言葉のルールも異なる。一方で、現代を生きるわたしたちと同じように感じ、考え、ときに悩み、乗り越えて喜ぶ人々の存在がある。先

人たちの営みを知り、その心を感じ、受けとめ、自身の心の糧とする。「古典」文学を読む楽しさが、よりよい一歩を踏み出す力にもなり得る。

「古典」文学の書き手は、「古代」という時代を生きたはずはなく、当時の「現代」を生きている。「古典」文学には、いまを生きる心が宿る。幼い日に誰かが教えてくれたことには、限りがある人としてのあゆみを進める以上、みずから答えをもとめていかなければならないことはふえる。生き続ける作品の心が、現在をあゆむ道しるべにもなり得る。

いま、「古典」を掲げるこのような場を得て、あらためて、「古典」文学の生き生きとした魅力を見出す稿者自身の基本姿勢を確認し、ひとつのささやかな試みとして、『紫式部集』の一首から考えてみたい。

## 二、紫式部と「身」

理屈どおりにはたちゆかない人の世に、いにしえ人はどのように向きあったのか。そう思うとき、ふと、「古典」文学にしばしばみられる「わりなし」という語が思い浮かぶ。「わりなし」は、まさにそうした理屈どおりにゆかぬ事態を表す語であり、辞書的には、道理に合わない、不条理だ、しかたがない、などと説明され、の意で用いられる語である。

いま、この語を初句に置く『紫式部集』の一首に着目してみたい。<sup>3</sup>

かばかり思ひうじぬべき身を、いといたうも上ずめくか  
なといひける人をききて

62 わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をやおもひすつ  
べき

『紫式部集』古本系本文の六二番歌である。詞書によれば、これほど物思いをして厭わしくなってしまうような身を、たいそうひどく上品ぶっていること、と人が言ったときいて、という。紫式部の生涯をほぼたどるように編まれた家集の配列から、これは中宮彰子の後宮に出仕したあとの歌であり、「人」とあるのは宮仕えの同僚仲間内に紫式部を非難している人がいたと解釈される。<sup>1</sup>一首は、わけのわからないことですよ。人は人と言わないのでしょうか、みずから我が身を思い捨てることができますでしょうか、という意味になる。

「身」と「心」は、『紫式部集』『紫式部日記』のキーワードであり、紫式部の心のありようを表すものとして注目されてきた。この歌の少し前には、「身」と「心」が詠まれた歌がならぶ。

身をおもはずなりとなげくことの、やうやうなのために、  
ひたぶるのさまなるをおもひける

54 かずならぬころに身をばまかせねど身にしたがふは心な

りけり

55 ころろだにいかなる身にかかなふらむおもひしれどもおも

ひしられず

はじめてうちわたりをみるにも、もののははれなれば

56 身のうさはころろのうちにしたひきていまこのへぞおも

ひみだるる

初出仕の五六番歌を含むこれらの歌は、華やかな宮廷での日々にあつて、身につきまとう厭わしさに気づく紫式部の心を表し、『源氏物語』を執筆する女性作家としての孤高な紫式部像に結びつけられることが多い。しかし、これらの歌のあとに、宮中行事の歌に入る直前に、六二番歌のような一首があることに注目される。ここでは、紫式部の「身」と「心」が詠まれているが、我が身を憂えて内向しているわけではない。紫式部におよそ好意を抱いてはいない宮仕え仲間からの中傷を仄聞して、紫式部は決して弱気になどなっていない。一首に詠まれているのは、人様はどうであれ、みずから我が身を思い棄てるなどということがあるでしょうか、わたしはわたしを大切に生きるのです、という自負であり、ここにあるのは自分自身への誇り高い意識である。

人の目や思惑が気になるのは、今も昔も変わるまい。そのなかで、

人の中傷という納得のゆかぬ事態が、「わりなしや」と表される。

紫式部からは理不尽でしかない中傷を一蹴するかのようには、「や」という助詞をともない、言い放つような初句の響きは強い。

### 三、「わりなし」と和歌

この「わりなしや」という初句にこだわって、さらに考えてみたい。い。

「わりなし」という語は、「ことわり」がないことを意味し、「ことわりなし」の用例は『日本書紀』『播磨国風土記』にみられるが、「わりなし」の用例は平安時代初期の散文作品から散見し、『源氏物語』に至り増大する。活用形ならびに「わりなさ」も含めてみると、『伊勢物語』三例、『大和物語』二例、『平中物語』一例、『蜻蛉日記』十八例、『枕草子』十一例、『うつほ物語』十六例、『落窪物語』十三例、『紫式部日記』五例、『源氏物語』に至っては優に百例をこえる。「わりなし」は、人間模様を描く壮大な物語世界のひとつのキーワードでもある。

一方、和歌における「わりなし」の用例は、『古今和歌集』が早い。

570 わりなくもねてもさめてもこひしきか心をいづちやらばわ

すれむ

よみ人しらず

『古今和歌集』恋二

885 心をぞわりなき物と思ひぬる見るものからやこひしかるべき

ふかやぶ

『古今和歌集』恋四

五七〇番歌は、恋二のよみ人しらず歌。「わりなくも」は「こひしきか」にかかり、寝ても覚めても恋しくてしかたのないわが心を、どうしようもないくらいにと詠んでいる。作者の特定される歌ではなく、特定の事情に由来する歌ではないようで、むしろ、恋をする誰しもが抱くごく自然な心情を表している。

恋四所収の清原深養父六八五番歌は、もう少し進んだ恋の状態を詠む。心とはどうしようもない理にかなわれないものと思うようになった。恋する相手と会っているのにまるで遠くにいる人のように恋しいということがあるだろうか、という意。逢っている最中に、どこか不安を感じている心境を詠んでいる。

『古今和歌集』入集歌は、ともに、恋の部に収められるよみ人しらず歌で、特殊な事情によるのではなく、恋する者に共通する心情を詠み、伝承性が強い。五七〇番歌は恋しくてたまらない胸中を、六八五番歌はもう少し恋の状態が進んで、恋い続ける我が心の状態を客観的に「わりなき物」ととらえている。勅撰和歌集の先駆けである『古今和歌集』入集歌として、これらは人口に膾炙し、理にかなわぬ恋が広く浸透していく。

続く『後撰和歌集』には、「わりなし」を詠み込む四首がみられる。

(よみ人しらず)

583 こひのごとわりなき物はなかりけりかつむつれつつかつぞ

恋しき 『後撰和歌集』恋一

をとこ侍る女をいとせちにいはせ侍りけるを、女いとわりなしといはせければ 元良のみこ

629 わりなしといふこそかつはうれしけれおろかならずと見え

ぬとおもへば 『後撰和歌集』恋二

つらかりける人のもとにつかはしける (伊勢)

820 こひてへむと思ふ心のわりなきはしにてもしれよわすれが

たみに 『後撰和歌集』恋四

1155 いたく事このむよしを時の人いふとききて 高津内親王

なおき木にまがれる枝もあるものをけをふききずをいふが

わりなき 『後撰和歌集』雑二

恋の部が三首、雑の部が一首である。

五八三番歌は、恋一に入集する。一首は、恋のように道理にあわないものはない、という。一方で親しくしつつ、また一方で恋しいと慕ってしまう、という心情は、前掲の『古今和歌集』六八五番歌にも通じている。

六二九番歌は、詞書に、すでに男のある女に、取り次ぎ役にとても熱心に言わせたなら、「とても理にかなわない」と言つてよこしたので、とある。一首は、「理にかなわない」という返事こそ一方ではうれいのです、私の思いが並大抵ではないと受けとめてくれたと思うから、という内容である。女の方は、人妻の身に懸想されることを理不尽と言つたのに対し、元良親王は女が自分を思つてくれていると都合良く詠んでいる。元良親王は陽成天皇第一皇子、そのエピソードは『大和物語』『今昔物語』『江談抄』などにあり、いづれごのみでも知られる親王である。『源氏物語』とも無縁ではなく、これも恋の歌である。この歌は、男女双方の立場からそれぞれの「わりなし」の解釈とともにある歌である。

八二〇番歌の詞書には、つれない人のもとに贈った（歌）とあり、このようにつれないあなたに恋して暮らそうとする私の心の不条理は、わたしが死んだとしても忘れ形見として知つていただきたい、という内容。少々大げさな言い方で、恋し続けてしまふわが心のわりきれなさを詠んだ歌である。

一一五五番歌は、恋の部以外である。高津内親王は桓武天皇皇女、詞書は、好色とその時の人が言うのと聞いて、という。内親王の時代の人を「時の人」と後世から表している。一首は、まっすぐな木にも曲がついている枝がついているのに。毛を吹き分けてあら探しをするのは不条理だという歌である。

こうしてみると、「わりなし」は、早くから多く詠まれてきた定番の歌語などではないが、それを詠み込む『古今和歌集』よみ人し

らず歌で人口に膾炙としたことがうかがえ、「わりなし」の対象となるのは恋が多い。

続く勅撰集では、『拾遺和歌集』にはなく『拾遺抄』のみにみられる歌が一首、『拾遺和歌集』『拾遺抄』ともに入集する歌が三首ある。

題不知

(読人不知)

238 いかにせいのちはかぎり有るものを恋はわりなし人はつれなし  
『拾遺抄』恋上

二三八番歌は、「題不知」とあり、伝承性が強い。『拾遺抄』独自のよみ人しらず歌は、どうしたものだろうか、命というのはかぎりあるものなのに。恋は理屈などでは説明できず、人は無情だという理屈どおりにはいかず、思いのままにならぬ恋というものが、「わりなし」と表される。

『拾遺抄』『拾遺和歌集』ともにある歌は、次のとおりである。

藤原のまさただが豊前守に待りけるとき、ためよりがおほつかなしとてくだり侍りけるに、むまのはなむけし待るとて  
藤原清正

332 思ふ人ある方へゆくわかれちを惜む心ぞかつはわりなき  
『拾遺和歌集』別(『拾遺抄』二二八)

いかるがにげ

みつね

420 ことぞともききだにわかずわりなくも人のいかるかにげやしなまし

『拾遺和歌集』物名〔拾遺抄〕四九五

これらはいずれも、恋以外の歌である。三三三番歌は、詞書によれば、藤原雅正が豊前守であった時に、その子の為頼が父を気がかりに思つて父のもとへ下つた折に、雅正の弟の清正が別れの儀をして詠んだ歌、という。一首は、思う人がいる方へ行く為頼との別れを惜しむ心は、一方では道理に合わないという意である。父を慕つて行く人との別れを惜しむことの、そぐわない思いを詠んだ歌。四二〇番歌は物名の部に収められ、名にちなんで詠まれている。「いかるがにげ」は「斑鳩二毛」で馬の毛並みを表すかと解釈されるところ。ここでは、その「いかる」に怒るをかけ、「にげ」に逃げるをかけて詠む。凡河内躬恒の歌は、事情がどうであるのか聞き分けることすらせずに、不条理にも人が怒るので、いつそ逃げてしまおうか、という意になる。

『拾遺抄』『拾遺和歌集』所収のもう一首は、初句に「わりなしや」と詠み出される歌である。

(題しらず)

(よみ人しらず)

943 わりなしやしひてもたのむ心かなつらしとかつは思ふものから  
『拾遺和歌集』恋五〔拾遺抄〕三四二

ここに至り、「わりなしや」という助詞をともなう初句の例が見いだせる。無理なことよ。恋が叶うことを強引にもあてにしていることだ。相手は冷たくてつらいと一方ではわかつているのに、という歌である。相手の心が自分に向いていないのをわかつていながら、それでも恋してしまう我が心のありようを、「わりなしや」と詠嘆しつつとらえる歌である。

たどりみてきたように、三代集では、「わりなし」を詠みこむ歌は、『後撰和歌集』雑、『拾遺集』別・物名の二首以外は、恋の部立てにある。『古今和歌集』所収の二首は、いずれも恋の部のよみ人しらず歌であり、理屈どおりになどゆかず理性などでは制御できない恋というものの本質を、「わりなし」の語に託して表す。『後撰和歌集』では、同時代には名の知られた元良親王や伊勢の恋歌に「わりなし」が用いられる。さらに、『拾遺和歌集』『拾遺抄』に至ると、初句に「わりなしや」を用いて詠み出すよみ人しらず歌が確認できる。平安時代中期に、「わりなし」を詠み込むよみ人しらず歌が流布していた様子が見える。紫式部の用いた「わりなしや」という初句は、時代の近い印象が強い。

#### 四、「わりなしや」と詠み出す歌

勅撰集以外に目を向けると、詞書の用例が『仲文集』にあるが、和歌本文に「わりなし」を詠みこんむ例は、平安時代中期に散見する。

248 ころをもかつはわりなしと思ふかないつまにかはもへ  
はかへらむ 『元真集』

人にかはりて

217 つの国の難波の蘆のうたたねはふし所こそ猶わりなけれ  
『元輔集』

かへし、本院にこそ

100 これはこれいしはいしとのなかはなかたのむはあはれうき  
はわりなし 『一条撰政御集』

消えかへり露もまだ干ぬ袖のうへに今朝はしぐるる空もわ  
りなし 『蜻蛉日記』道綱母

藤原元真、清原元輔、一条撰政藤原伊尹への本院侍従返の歌、『蜻蛉日記』中の道綱母詠である。『蜻蛉日記』は、他作品にくらべ地の文にも「わりなし」が多く、道綱母自身にも詠まれている。

初句に「わりなしや」を置くよみくちにこだわってみると、私家集でも、平安中期に用例が見いだせる。

96 おなじところにさぶらひける人、そ香殿にまゐりにける  
に、みし人とおぼえたらぬ事といひたりければ  
わりなしや身はこのへにありながらとへとは人のうらむ

べしやば

『実方集』

『実方集』の歌は、詞書によれば、同じところにお仕えしていた人が、いまは承香殿に参上していたところ、「かつて出逢った人とお思いにならないこと」と言ったので、とあり、かつてともに仕えていた女性のことばへの歌である。一首は道理にあわず困ったことですなえ、身は宮中の九重にありながら、とへ（訪へ）<sup>8</sup> 十重などと、人が恨むべきでしようか。無理なことですよ、という意。木船重昭氏の考証によれば、この時承香殿にいるのは円融帝女御遊子であり、『日本紀略』天元元年八月十六日条の記述に明記されることから、それはまず動かない。一首は、言葉遊びの要素を含みながら、いま宮中に仕える女性に、無理ですよ、と切り出して応じる歌である。

「わりなしや」を初句に置く歌は、『小大君集』にもある。

92 おやおもひにてれいくるところにえござりける人の、  
このほどにありきしたらば、とちかひけるを、うけひか  
ざりければ、つとめて、よべはわりなくといひて  
わりなしやそらごとによりちかひせげふまであらんもの  
とやは思ふ 『小大君集』

詞書によれば、親の服装中で、いつも来るところに来られなかつた人が、「このような時に出歩くのは不謹慎だから誓った」という

のを、私が承知しなかったので、(その夜は来ず)、翌朝、「夕べはしかたがなく」というので、といってよこした歌とある。一首は、無理だったのですよ、嘘の誓いごとなどをしたら、今日まで生きていられるでしょうか、という。前後の歌との関連から、この男性は藤原朝光と考えられ、これは小大君のもとを訪ねられなかった言いわけの歌である。これも男女の恋のやりとりで、恨み言を言われた男性が、やむを得なかったのですよ、無理だったのですよ、と切り出して応じている。

私家集でも、初句に「わりなしや」が置かれる例は、平安中期に至り、『拾遺和歌集』の用例とともに、この時期に広まったよみくちであることがうかがえる。

ちなみに、仮名散文作品の「わりなしや」の用例は、『うつほ物語』に「あなわりなしや」(祭の使)、『枕草子』に「いとわりなしや」で各一例ずつ、ともに会話である。『源氏物語』では玉蔓、夕霧、武河、総角、宿木の各巻にみえ、会話や心内語に用いられる。また、『紫式部日記』では日記文に綴られる心中の用例である。散文は、語り口調の印象がある。

『紫式部集』六二番歌に立ち戻れば、当世風な印象が強く、語り口調的な語感さえともなう「わりなしや」を初句に置くよみくちによって、宮仕えにある我が身を詠み表している。さらに、和歌史において主に恋の心情を担ってきた「わりなし」が、人の中傷を仄聞した我が身を表すことに用いられる。宮仕えの場での不条理に対する

心情を「わりなしや」に託し、我が身の誇り高い自負を詠み表した斬新な一首が、この六二番である。二句以降も、定番の歌語や技巧などは用いず、率直に自身の心を表している。

時代を経て、紫式部の用いたことばは、『源氏物語』作者の歌という評価も得ることになる。「わりなし」に着目すれば、実際『源氏物語』にも桐壺帝と桐壺更衣の悲恋から宇治十帖の匂宮の行爲まで、その多様な人間模様を表すことばとして、機能してもいる。一方で、この和歌にまっすぐ向き合う読み手がいる。『源氏物語』の作者をこえて、一首の自立した歌が人の心に受けとめられる。みづからを尊ぶその姿勢は、彰子中宮の後宮という特定の場合や紫式部という個人を離れて、それぞれの時代を生きた人の心に響いていく。「古典」の和歌が、現代に生き続ける。

#### 注

- (1) 『三玉鑑』の本文引用は、新日本古典文学大系(岩波書店)による。
  - (2) 西郷信綱『日本古代文学史 改稿版』(岩波書店 一九六三年)。
  - (3) 和歌本文の引用ならびに歌番号は、原則として新編国歌大観(角川書店)による。
  - (4) 『蜻蛉日記』の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)による。
  - (5) 『紫式部集』所収歌の解釈については、拙著『紫式部』(笠間書院 二〇一二年)と重複する部分がある。
- (5) 管見に入った用例は、次のとおりである。引用は、新編日本古典文学全集(小学館)による。

太た道理無し。

『日本書紀』卷十四 雄略天皇十一年十月

妹いもの神見かみみて、非理ことおかしと以為おもはず ……略…… 『播磨風土記』揖保の郡

(6) 元良親王と『源氏物語』の末摘花の関連については、かつての拙稿「『源氏物語』と「からころも」『跡見学園女子大学文学部紀要』第四十八号（二〇一三年三月）で言及したことがある。

(7) 『仲文集』の例は次のとおりである。

れせい院おほむ心ちのさかりに、まひよくせよと、くら人なりし  
かば、さいなめば、いとたへがたし、しらぬことなればいとわり  
なしとて、衛門内侍に

(8) 80 おいおいはいかがはずべきしらぎまひたちまふべくもおもほえぬよを  
木船重昭『実方中將集』小馬命婦集（大学堂書店 一九九三年）。